

記憶と道徳性：エピソード記憶帰属におけるノーズ効果の検証

稲荷森 輝一 (Kiichi Inarimori)¹・駒田 珠希 (Tamaki Komada)²・
宮園 健吾 (Kengo Miyazono)²

1. 広島大学
2. 北海道大学

本研究は、エピソード記憶の帰属判断が道徳的要因によって影響を受けるかを検証し、その結果から記憶概念に関する哲学的含意を考察することを目的とする。近年、実験哲学の隆盛により、伝統的に哲学的議論に委ねられてきた問題が、実験的手法を通じて検討されるようになってきている。しかし、エピソード記憶の哲学的理論と我々の直観的な記憶帰属との関係については、ほとんど実証的に研究されてこなかった。

エピソード記憶とは、特定の時間・場所で経験した出来事に関する自伝的記憶を指し、手続き記憶や意味記憶と区別される。その成立条件をめぐっては、過去の出来事と記憶表象との因果的連関を重視する因果説 (Martin & Deutscher, 1966) と、再構成的プロセスを強調するシミュレーションイズム (Michaelian, 2016) が対立している。

その一方、近年の実験哲学の興隆にも関わらず、こうしたエピソード記憶に関する哲学的理論が我々の記憶概念と整合的であるか否か、他者に対する記憶帰属を行う心理的プロセスにはどういった要因が影響するかという問題は、実験哲学の文脈ではほとんど検討されていない。実験哲学 (Experimental Philosophy) は、哲学的な概念や直観を、心理学的な実験手法を用いて経験的に探究する新しい研究分野である。この分野の興隆により、多くの哲学的概念 (例：知識、自由意志、責任など) が実験的検討の対象となってきた。

本研究は、このギャップを埋めるための最初のステップとして「ノーズ効果 (Knobe Effect)」に着目する。ノーズ効果とは、判断対象の道徳的価値が他の心的状態の帰属判断に影響を与える現象であり、意図性 (Knobe, 2003) や知識 (Beebe & Buckwalter, 2010; Beebe & Jensen, 2012) の帰属において確認されてきた。本研究では、この効果がエピソード記憶の帰属にも及ぶかを検証する。具体的には、道徳的にネガティブな内容 (例：賄賂の記憶) とニュートラルな内容の記憶を提示し、オンライン実験で人々の帰属判断を比較する。

もし道徳的に「悪い」記憶の方が「本人の記憶」と判断されやすいという傾向が確認されれば、記憶帰属が純粋に認識論的な要因だけでなく、道徳的価値という非認識論的要因によっても規定されることが示される。以上を通じて本研究は、エピソード記憶の哲学的理論に対して新たな視座を提供することを目指す。

文献表

- Beebe, J. R., & Buckwalter, W. (2010). The epistemic side-effect effect. *Mind &*

Language, 25(4), 474–492.

- Beebe, J. R., & Jensen, M. (2012). The moral side-effect effect. *Philosophical Psychology*, 25(2), 273–288.
- Knobe, J. (2003). Intentional action and side effects in ordinary language. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39(2), 190–199.
- Michaelian, K. (2024). Radicalizing simulationism: Remembering as imagining the (nonpersonal) past. *Philosophical Psychology*, 1-27.
- Martin, C. B., & Deutscher, M. (1966). Remembering. *The Philosophical Review*, 75(2), 161–196.